

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「ローソン、北海道でエゾシカ弁当販売」
- 2) 「リンガーハット、信州大学とコンテナ植物工場を共同開発」
- 3) 「観光誘致で復興支援 角川が“東北ウォーカー”発行」
- 4) 「テレビが報じない節電対策」

1) 「ローソン、北海道でエゾシカ弁当販売」

北海道と包括連携協定を結んでいるコンビニエンスストア大手のローソンは 15 日、エゾシカ肉の有効活用に向けて弁当とおにぎりを 26 日から道内店舗で販売すると発表した。同社によると、エゾシカの商品化は業界初という。

エゾシカの肉は、斜里町と釧路市阿寒町で育てられたものを使用。弁当は行者ニンニク入りのタレにつけ込んだシカ肉を焼き上げ、再びタレに絡めて風味豊かに仕上げた。おにぎりの具のシカ肉はタレにつけ込んでから焼き上げ、キムチとあえることでうまみと辛さを引き出した。販売は 8 月 8 日まで。

これまでは個人商店や高速道路の SA などでご当地物として提供されていることが多かったが、このように大手チェーンが販売するとなるとより多くの人目に触れることになり、消費も増えるのではないかと懸念されている。害獣と呼ぶのはちょっと胸が痛むが、実際に農作物の被害を受けている人にとってはそれどころではないだろう。この取り組みが良い方向に進むことを期待したい。

2) 「リンガーハット、信州大学とコンテナ植物工場を共同開発」

リンガーハットと信州大学繊維学部とアグリウェーブは、共同研究により「災害地対応を可能にしたコンテナ植物工場」を開発した。

一般的な植物工場は、移動を前提としていないが、コンテナ植物工場（コンファーム）は、移動が可能であることが大きな優位性のコンセプトとした。運搬しながら栽培可能な構造であり、迅速に災害地などに運搬・設置ができる仕様のコンテナ植物工場を開発した。

運搬において道路交通法に適法させるため、コンテナ外部の突起物を完全になくす構造を採用。水耕栽培用の養液がこぼれないシステムの導入を行った。本仕様のコンテナ植物工場はリンガーハットに納入した。今回のコンテナ植物工場は今後生産する多数のコンテナ植物工場のモデルとなる予定だ。

リンガーハットは、これを契機として信州大学との本格的な共同研究開発を実施する予定。現状では、コンテナ植物工場による外食産業向け主力野菜生産は、コスト、供給量ともに見合わないため栄養成分に特徴ある野菜など、有用な機能性野菜の開発などを進めて行く計画だ。

「付け合わせ」用の野菜などには有用だと考えられ、機能性野菜の栽培研究を通して自社内の野菜生産へと繋げて行く予定だ。緊急時としてだけではなく、工場建設の必要が無くお手軽な植物工場という見方もできる。大量に使う野菜は供給に間に合わないため、限りある野菜だけにはなるが企業にとっては、自社内の野菜生産が視野に入る研究なのかもしれない。

3) 「観光誘致で復興支援 角川が“東北ウォーカー”発行」

角川マガジンは7日、雑誌『東北ウォーカー2011 夏』（税込480円）を、14日に緊急発売すると発表した。夏祭り、花火大会のほか、世界遺産登録が決定した岩手県・平泉、東北グルメなどを紹介。また、1冊につき100円を東北の観光誘致のために拠出する。同誌はタウン情報誌の草分け的存在『東京ウォーカー』の増刊号として発行。20年にわたり培ってきた街、味、グッズの魅力を紹介する情報発信力を活用し、“観光誘致”“物産消費”の面から東北の復興を支援するため、4月上旬にプロジェクトを立ち上げ、観光庁の後援を得て企画を進めてきた。東北6県の観光PRを行う「東北観光推進機構」と連携しており、今後についても「秋冬以降の東北の観光誘致施策に役立てられるよう、すでにいくつかのアイデアが出ている」（同社）という。

誌面では“今だからこそ訪れたい東北への旅”をテーマに「夏祭り&花火大会」、「観光エリア・ご当地グルメ」を特集しているほか、「ボランティア参加マニュアル」も掲載。関東地方では多くの花火大会や夏祭りが中止となったが、東北では例年通りに開催するところが多い。そんな東北のパワーと魅力を、情報誌ならではの楽しさで発信している。

物資や、義援金の支援ではなく、違う切り口での支援の方法で以前のような観光地の風景を取り戻すことが出来そうだ。今まで東北の事をよく知らなかった人もこういった取り組みをきっかけに興味をもってもらえそうで、これからこういった支援のかたちが増えることを期待したい。

4) 「テレビが報じない節電対策」

日本全国でエアコンの温度を上げたり電気をこまめに消したりといった節電が行われていますが、じつはテレビが報じない家庭でできる最強の節電対策があります。それは、テレビを消すこと。

株式会社野村総合研究所が4月15日に発表した『家庭における節電対策の推進』によると、テレビを消した方がエアコンを消すよりも1.69倍も節電に効果があることが分かっています。

主な節電対策を講じた場合の1世帯あたりの期待節電量

- ・白熱電球3つを消す（162W）
- ・液晶テレビを消す（220W）
- ・テレビ・DVDレコーダー・パソコンのコンセントを抜く（6W）
- ・エアコン2台の温度設定を2度上げる（52W）
- ・エアコン1台を止める（130W）
- ・白熱電球3つを蛍光灯に交換する（126W）

この表を見ればテレビを消した方がエアコンを消すより 1.69 倍、90W もの節電効果があることが分かります。

ただ、テレビについても 42 インチ以上（もしくはブラウン管やプラズマ TV）でなければ 200W をこえるものはなかなかなく、一人暮らしの部屋など大型のテレビが必要ない部屋では野村総研のレポートよりもその節電効果は小さくなることとなります。

いずれにせよエアコンはピーク時間を外した時間に電源を入れておけば、500W とも 600W とも言われる電力をピーク時間に消費することはないのです。

テレビがないと困る人もいるかもしれませんが、エアコンを消して熱中症のリスクが増すことよりはマシだと思いますので、家族とのだんらんを楽しむなり本を読むなりして過ごしましょう。

どうしても「季節家電」に目が向きがちだが、通年使用するテレビの消費電力の高さに気が付いていない人は意外と多いのかもしれない。エアコンを我慢して熱中症を起せば死につながることもあるが、テレビを我慢したからと言って死ぬ人は恐らくいないだろう。こうしたことをもっとテレビに伝えてもらいたいが、そうもいかないのか…